

## ASEAN グローバルプログラム を終えて

倉田 湖乃花

Konoka KURATA

環境ソリューション工学科 2年

### 1. はじめに

2017年8月29日から9月7日までの8泊10日でベトナムのハノイ、シンガポールの2カ国を訪れるASEAN グローバルに参加した。研修では、ベトナムに進出した日系企業・現地企業を訪問し進出した理由や世界の関わりを学ぶ、母国語が異なる仲間と課題に取り組む難しさを学ぶ、シンガポールで働くビジネスパーソンと交流し海外で働くことについて学ぶ、世界最先端都市を実感するなどが目的であった。

### 2. 志望動機

私がこのプログラムに参加しようと思ったのは、海外への好奇心が強かったからである。家族で海外旅行をすることもなく、修学旅行で海外に行く機会も無い一方で、海外経験のある親や友達からの話により海外に行くことに憧れを抱いていた。大学生になると自分でお金を貯めることができるので、学生の間に一回は必ず海外に行こうと考えていた。そんなときこのプログラムを見つけ、必ず参加したいと思ったのである。

### 3. このプログラムでの個人目標

私がこのプログラムで是非習得しようと思った目的は3つあった。1つ目は、海外で働いているビジネスパーソンはなぜ日本ではなく海外で働くのかを知る。2つ目は、海外と日本の社会、文化の違いを発見する。3つ目は、母国語の違いを感じることであった。

### 4. 南洋理工大学 (NTU) プログラム

9月4日に南洋理工大学を訪れた。この大学は世界でもトップクラスの大学と聞いてた。ここでは昼食を各自で食べた後、大学での研究所を一通り見学し、実際の講義にも参加させて頂いてから、最後にこの大学の学生との交流会というスケジュールが組まれていた。私たちはホテルから大学へと向かったのだが、まず初めに驚いたのは大学の敷地面積の広さであった。大学の敷地内に沢山の学生寮があるため、大学と言うよりもシンガポールの住宅街にいるような気分になった。長い坂道の上にある施設に到着し昼食をとることになったのだが、ここではお店の多さに驚いた。パン屋、中華料理店、ファーストフード店と商店街のように並んでいた、なぜか校内の自動販売機のほとんどの飲み物は売り切れだった。

研究所見学では肩にかかる負担を軽減させるための肩用ベルトなど医療分野の商品の製作や、カーボンファイバーでつくる車、飛行機が離着陸におけるシミュレーションの機械さらにドローンの利用等に関する研究など様々な研究を見ることができた。私にとってはどれも普通の大学レベルを超えて見えた。研究所内の方がとても熱心に内容説明をしてくださっているのを見て、自分にも真剣に打ち込めるものがほしいと思った。また説明が終わるたびに質問はありませんかと尋ねてくださるが、自分が全然質問できなかったことが残念だった。

講義参観について、講義内容は「熱伝導」についての講義であった。私には内容理解がほとんどできなかったが少しメモをとり図から理解できる部分を探したりした。

この大学には日本人の方も在学しているらしく、それを聞いてから周りを見渡してみると様々な国の人々を見ることができた。最後の南洋理工大学の学生さんとの交流会では、二人の学生さんが学校紹介をしてくださった。一人の学生さんがロボット同士の戦い(コンテスト)に使われるというロボットを

実際に動かして頂き、ターゲットに的を定めるレーザーが出たり、そのロボット本体のライフゲージなどを見せて頂いた。こちらからも龍谷大学の紹介をさせてもらい、最後に集合写真を撮った。

南洋理工大学は広大な土地をフル活用し、研究や勉強の場を与える世界トップクラスの大学であり、様々な人々との交流がもてる場所で会った。

## 5. おわりに

今回の研修の中で一番私が抱いた感情は悔しさであった。やはり海外に来て一番思い知らされるのはその国々の母国語の大切さであった。ジェスチャーや単語でも意思疎通は可能であった。しかし、母国語が異なる方とでもなんとなく仲良くなれたら、次はもっと仲良くなりたいと思うようになる。こんな時、もっと単語を知っていれば、リスニング力があればと思うことが何回もあった。個人目標の3つ目である母国語の違いというのを知り、私の英語力はまだ海外では通用しないことが分かった。しかしこれを機に、以前よりも英語に興味を持つようになった。

私はこれからも海外に行きたいと考えるようになったので、自分一人で旅ができるくらいまでの自分成長計画を立てようと思った。個人目標の1つ目であるビジネスパーソンが海外で働く理由としては海外留学が大きなきっかけとなっているようであった。また、海外で働くには自分自身の積極的な行動が必要であると分かった。留学にしろ海外赴任にしろ、最終的に自分が決めることであるので、そこで積極的になれたときに海外で生活するという覚悟ができあがると考えた。

個人目標の2つ目である日本と海外との社会、文

化の違いを知るに関しては本当に沢山の違いを発見することができた。ベトナムでの交通手段はほとんどがタクシーかバイクであった。ベトナム人は何かあったらすぐにクラクションを鳴らす傾向があったため、朝も夜もとても賑やかだった。また、どこにでも椅子があるため町中でくつろげた。屋台の飲み物は常温なので飲むときは水を入れて飲んだりした。暑いことに加え、不便なことがないとは言えないベトナムだが人柄は本当に優しく決まりなども緩かったのでとてもおびおび過ごすことができた。シンガポールは栄えていることが目に見えて分かる国だった。ビルの多いので夜景がとてもきれいであった。道も整備されていて、歩道が結構どの場所も広かった。また交通手段としては地下鉄がとても便利であった。電車の本数が多くあまり待つこと無くいつも数分待つだけで乗ることができた。また、地下鉄のエスカレーターだけスピードがとても速かった。このように、聞いた話、日本で流れているニュース、本などだけでは分からないことを自分の目で見、肌で感じることができた。

このプログラムでしんどいと感じることもあったが、それ以上に1日1日のスケジュールを海外でやりきった達成感があった。好奇心が先行して参加を決めたプログラムであったが、今では海外で働きたいなどのような新しい自分目標を持つことができるプログラムだったと振り返る。このプログラムに関わってくださった方々にはお世話になりました。そして本当にありがとうございました。もし私が海外で働くことがあれば、このプログラムにビジネスパーソンとして呼んでもらえるのではないかと考え、自分の将来を楽しみにしている。